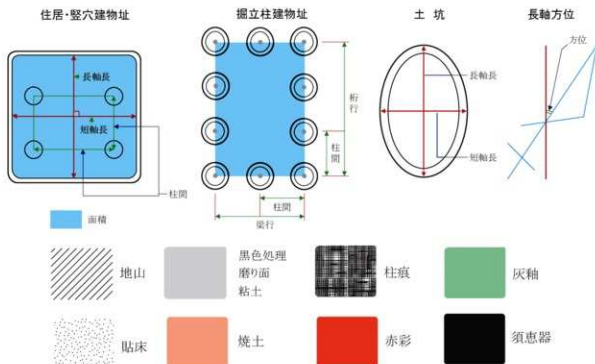


例 言

1. 本書は、ルートインジャパン株式会社が行うホテル増築工事に伴う発掘調査報告書である。
2. 調査原因者 ルートインジャパン株式会社 代表取締役 永山泰樹
3. 調査主体者 佐久市教育委員会
4. 遺跡名及び調査面積 三千束遺跡群 市道遺跡VI (IM VI) 560㎡
5. 所在地 佐久市三塚字市道 127-1、127-2
6. 調査期間 令和元年 12 月 2 日～令和 2 年 4 月 23 日 (現場発掘作業)
令和 2 年 4 月～令和 3 年 3 月 (報告書作成作業)
7. 調査担当者 富沢一明
8. 本書及び出土遺物は、佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

凡 例

1. 遺構の略記号は、住居址 (H)・掘立柱建物址 (F)・土坑 (D)・溝状遺構 (M) である。
2. 挿図の縮尺については、挿図中にスケールを示した。
3. 遺構の標高は遺構ごとに統一し、水系標高を「標高」とした。
4. 土層の色調は、1988 年版『新版 標準土色帖』に基づいた。
5. 遺物挿図番号、遺物写真番号、遺物観察表番号は一致する。() は推定値、< > は残存値である。
6. 測量座標は世界測地系を用い、調査区グリッドは公共座標の区割りに従い、間隔は 4 × 4 m に設定した。
7. 遺構の計測値は下図に示した部分の計測値である。挿図中における網掛けは以下を示す。



目次

例言・凡例

目次・調査体制

第Ⅰ章 発掘調査の経緯

第1節 調査の経緯

第2節 調査日誌

第3節 調査の概要

第4節 基本層序

第Ⅱ章 遺構と遺物

第1節 竪穴住居址

第2節 掘立柱建物址

第3節 土坑

第4節 溝状遺構

第5節 ビット

遺物観察表

第Ⅲ章 調査成果

写真図版

抄録



遺跡遠景（南より）奥に見える山並みは冠雪の浅間山

調査体制

令和元年度・令和2年度

調査受託者	佐久市教育委員会	教育長	榑澤晴樹				
事務局	社会教育部長	三浦一浩	青木 源（令和元年度）				
	文化振興課長	東城 洋					
	企画幹	岡部政也	吉田 晃（令和元年度）				
	文化財調査係長	山本秀典					
	文化財調査係	小林真寿	羽毛田卓也	富沢一明			
		上原 学	久保浩一郎				
	調査員	赤羽根篤	赤羽根充江	浅沼勝男	小林妙子		
		堀籠まゆみ	橋詰信子	橋詰勝子	田中ひさ子		
		柳澤孝子	清水律子	堀籠保子	横尾敏雄		
		依田好行	中澤 登	羽毛田利明	木内修一		
		比田井久美子	松本仁直	高野園美	眞輪由紀		
		大矢志慕					

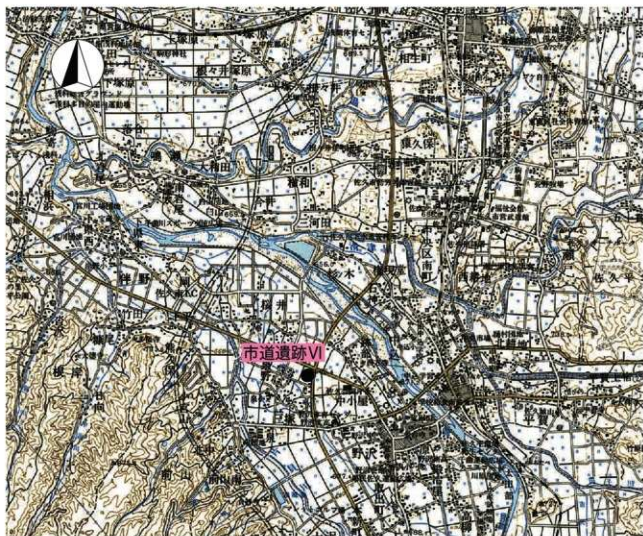
第I章 発掘調査の経緯

第1節 調査の経緯

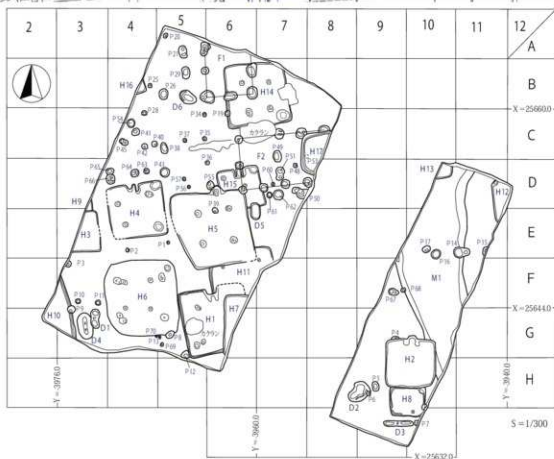
市道遺跡VIは三千東遺跡群の中央に位置し、標高667mを僅かに越える沖積微高地に所在する。調査地点の地形は南から北へと緩やかに傾斜する微高地で、この周辺部のみ古くから畑作が営まれていた。今回の調査は市道遺跡としては6次の調査であり、1次が昭和50年の周辺部圃場整備に伴う発掘調査であり、2次が平成10年の当ホテル建設に伴うものである。また、ホテル敷地に接し東西と南北にのびる国道141号と142号の拡幅工事の折も発掘調査が行われている。

これら遺跡の調査では古墳時代中期から平安時代に及ぶ集落址が検出された。特に、遺跡周辺部の土質が粘性土ということもあり、調査事例の中にはカマドの残存状況が良好なものも多く、貴重な資料を提示した竪穴住居址もあった。

今回、遺跡群内においてルートインジャパン株式会社がホテルの増築を計画し、文化財保護法93条が長野県教育委員会宛て、佐久市教育委員会に届出された。市教育委員会では該地の試掘調査を行い、予定地内から遺構を発見した。保護協議の結果、工事により遺跡破壊が及ぶ範囲については記録保存を目的とする発掘調査を行うことになり、佐久市教育委員会文化振興課において発掘調査が実施される事となった。



第1図 市道遺跡VI位置図(1/50000)



第2図 周辺遺跡及び市道遺跡VI調査全体図

第2節 調査日誌

- 令和元年8月9日 ルートインジャパン株式会社より土木工事等のための埋蔵文化財発掘の届出。
8月13日 長野県教育委員会へ市教育委員会より元佐文教振第1309-2号土木工事等のための埋蔵文化財発掘の通知について（副申）
8月20日 長野県教育委員会より元教文第7-952号にて周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）
9月19日 ルートインジャパン株式会社より埋蔵文化財調査費概算見積依頼が提出。
11月12日 ルートインジャパン株式会社と市教育委員会により埋蔵文化財発掘調査委託契約を締結。
12月2日～ 記録保存目的による開発対象地の発掘調査を行う。
令和2年4月23日 冬季に調査が及んだ為、新年度に残り分を行う。現場作業終了後に引き続き報告書作成作業を行う。
令和3年3月 報告書を刊行し、記録類・出土品を整理保管してすべての作業を終了する。

第3節 調査の概要

遺構	竪穴住居址	17軒（古墳時代中・後期6軒、奈良・平安時代5軒、不明6軒）
	掘立柱建物址	2棟
	土坑	6基
	溝状遺構	1本
	ピット	146個
遺物	弥生土器（箱清水式）	土師器 須恵器 灰釉陶器 石製品 鉄製品

第4節 基本層序

今回の調査地点は北方向に向かいゆるやかに傾斜する沖積微高地上に立地する。基本層序は5層に分かれる。遺構確認面はV層上面である。

層序

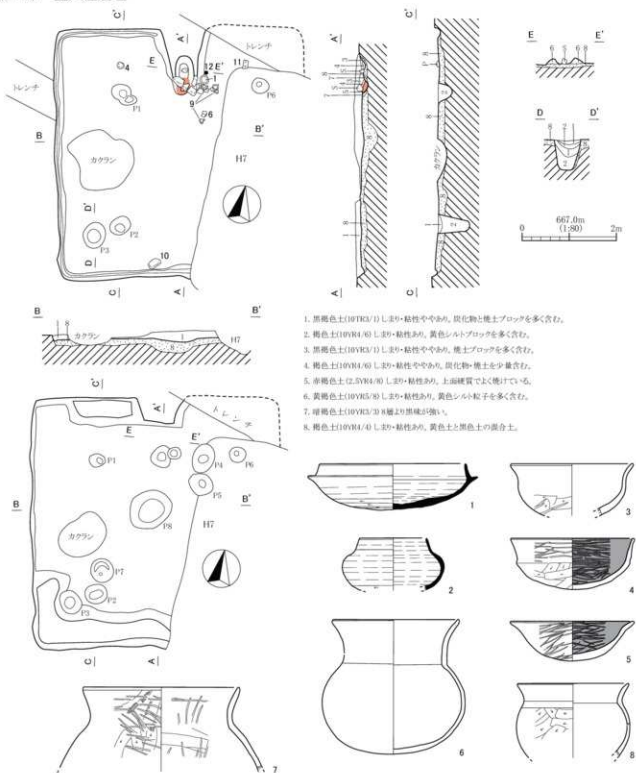
- 第I層 10YR7/1 灰白色土（盛土）
第II層 10YR4/1 褐灰色土 しまり・粘性あり。水田耕作土
第III層 5YR3/6 暗赤褐色土 しまり有り。水田下層の鉄分の沈下層
第IV層 10YR2/1 黒色土 しまり・粘性あり。
第V層 10YR5/6 黄褐色土 しまり弱く、粘性あり。細かなシルト層



土層堆積状況

第II章 遺構と遺物

第1節 竪穴住居址



第3図 H1号住居址及び出土遺物実測図

1~8 (1:0)

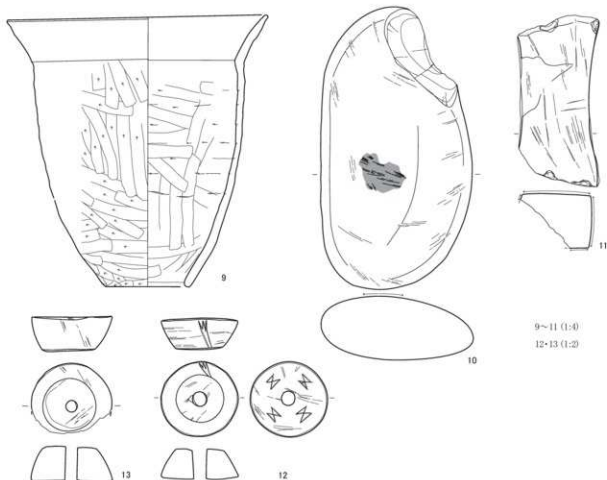
(1) H1号住居址

本址は調査区中央F・G-5・6Grで検出された。住居東側をH7号住居址により削平されていた。また、北東コーナー部分が削平され形態が確認できなかった。形態は検出された部分で方形を呈する。規模は南北長4.98m、確認できた東西長4.44mを測る。検出された部分の床面積は16.0㎡である。主軸方位はN-10°-Wを測る。壁高さは西壁で0.12mを測る。ピットは掘方も含め8ヶ所検出された。規模はP1が径0.55m・深さ0.30m、P2が径0.48m・深さ0.66m、P3が径0.56m・深さ0.64m、P4が径0.62m・深さ0.55m、P5が径0.54m・深さ0.56m、P6が径0.38m・深さ0.52m、P7が径0.48m・深さ0.60m、P8が径0.96m・深さ0.17mであった。床は貼床が施され、カマド周辺は特に硬質であった。

カマドは北壁中央に構築されていた。袖と天井部は黄色シルト土と川原石により構築されていた。顕著な火床部と支脚石が検出された。規模は袖長さ1.26m・高さ0.14m、焼土径0.38m・厚さ0.1mを測る。また、掘方は北壁に接する部分は台形状に掘り残されていた。

本址からの出土遺物はカマド周辺部や覆土から比較的多く出土した。1は須恵器坏身で完形で、カマド脇から出土した。2は須恵器短頸壺である。3～5は土師器器環で、4は須恵器模倣坏で内面黒色処理されている。カマド東側の床面上より出土した。9は単孔の土師器甕でカマド脇より破砕した状態で出土した。11は大型の砥石で3面の砥面が確認できる。10は磨り石で磨り面と擦痕が確認できる。12と13は石製紡錘車で、特に12は滑石製で上面にさ刻線による三角文が2対、4か所に描かれている。

本址の所産時期はこれらの出土遺物により6世紀中葉と考えられる。



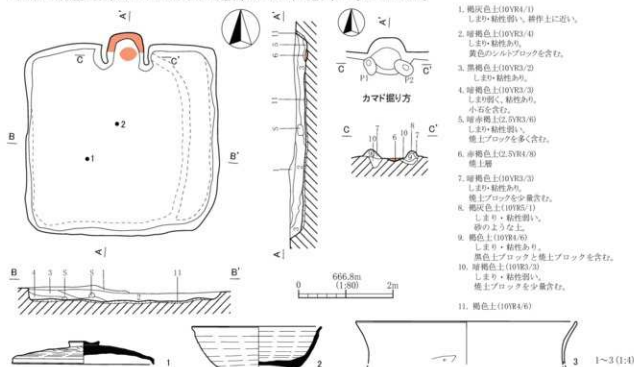
第4図 H1号住居址出土遺物実測図

(2) H 2号住居址

本址は調査区東側のG・H-9・10Grで検出された。形態は方形で、規模は南北長3.61m、東西長3.87mを測る。床面積は13.66㎡である。主軸方位はNを示す。壁の高さは0.15～0.25mを測る。床は0.03～0.07mの厚さで施され、カマド周辺は特に硬質化していた。カマドは北壁中央につくられ、シルト土で袖がつくられていた。また、袖下にはピットが2ヶ所確認され、構築材の埋め込み跡と考えられる。ピット規模はP1が径0.36m・深さ0.20m、P2が径0.43m・深さ0.15mを測る。

遺物は覆土を中心に出土し3点を図示した。いずれも覆土からの出土で、1は0.15m、2は0.06m床面より浮いた状態で出土した。1は須恵器蓋、2は須恵器環である。3は土師器裏でいわゆる武蔵甕と呼ばれるものである。

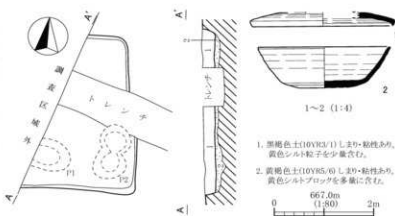
本址の所産時期はこれらの出土遺物から8世紀代と考えられる。



第5図 H 2号住居址及び出土遺物実測図

(3) H 3号住居址

本址は調査区西側のE-3Grで検出された。西側が調査区域外となり、住居の1/3程の検出にとどまった。形態は方形と考えられ、規模は南北長3.12m、検出部の東西長2.16mを測る。床面積は検出部で4.69㎡である。主軸方位はN-4°-Wを示す。壁の高さは0.15～0.23mを測る。床は0.03～0.18mの厚さで施されていた。ピットは掘方検出時に2ヶ所確認された。規模はP1が検出部で径0.72m・深さ0.14m、P2が径1.12m・深さ0.17mを測る。



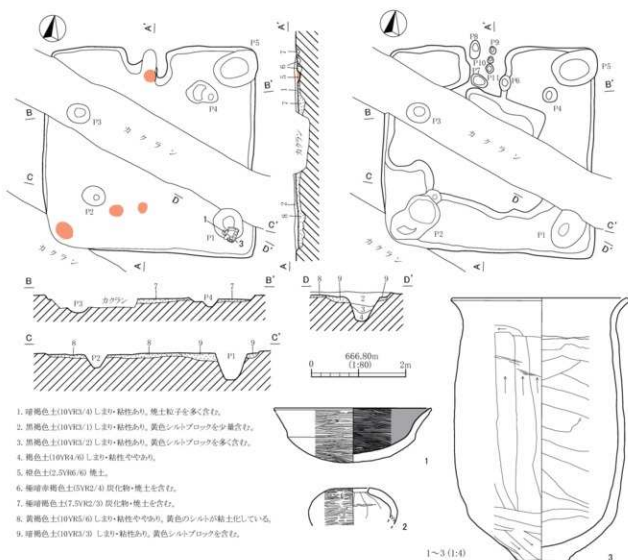
第6図 H 3号住居址及び出土遺物実測図

本址からの出土遺物は少なかったが、2点を図示した。1は須恵器蓋で、天井部を欠損する。2は須恵器環であり、底部回転糸切離しが施されている。

本址の所産時期はこれらの出土遺物から不確定ではあるが8世紀代と考えられる。

(4) H 4号住居址

本址は調査区西側のD・E-4Grで検出された。住居中央部分が構築物により削平されていたが、ほぼ全容を調査した。形態は方形で、規模は南北長4.08m、東西長4.32mを測る。床面積は17.74㎡である。主軸方位はN-8°-Wを示す。壁の高さは0.04~0.07mを測る。床は0.02~0.08mの厚さで施され、カマド周辺は特に硬質化していた。カマドは北壁中央につくられ、シルト土で袖がつくられていた。ピットは掘方も含め11ヶ所が確認された。規模はP1が径0.64m・深さ0.40m、P2が径0.50m・深さ0.2m、P3が径0.52m・深さ0.11m、P4が径0.68m・深さ0.16m、P5が径0.98m・深さ0.14m、P6が径0.30m・深さ0.05m、P7が径0.40m・深さ0.09m、P8が径0.40m・深さ0.09m、P9が径0.18m・深さ0.07m、P10が径0.14m・深さ0.07m、P11が径0.18m・深さ0.07mを測る。P2~P4は支柱穴と考えられるが不規則である。住居掘方は中央部分が一段高くなる掘方であった。



第7図 H 4号住居址及び出土遺物実測図

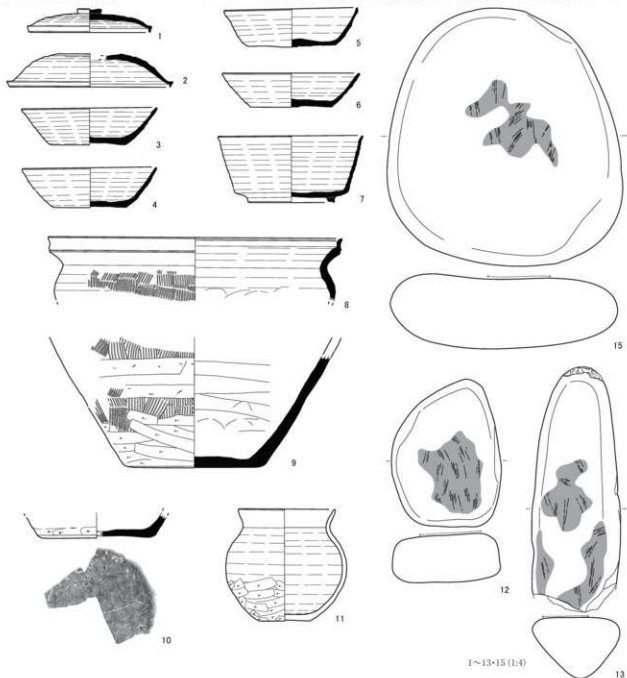
カマドは北壁中央に構築されており、シルト土で袖をつくっていた。火床部は弱く焼けており、焼土の厚みは0.04mであった。

本址からの出土遺物は少なく3点を図示した。1は土師器環で、内面黒色処理されている。貯蔵穴と考えられるP1から出土した。2は無頸壺の一部と考えられるが不確実である。3は土師器長胴甕で、1と同じくP1からの出土である。穴に落ち込むように潰れた状態で出土した。

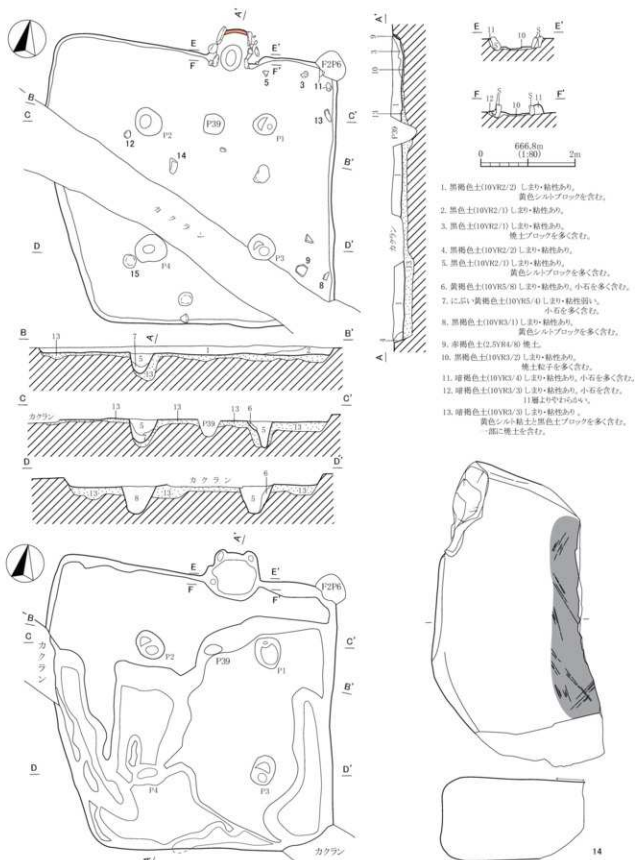
本址はこれらの出土遺物から6世紀代の所産時期と考えられる。

(5) H5号住居址

本址は調査区中央のD・E・F-5・6Grで検出された。住居中央部分が構築物により削平されている



第8図 H5号住居址出土遺物実測図



第9図 H5号住居址及び出土遺物実測図

たが、ほぼ全容を調査した。形態は西壁がややいびつな方形で、規模は南北長 5.52 m、東西長 6.00 m を測る。床面積は 31.02 m² である。主軸方位は N-8°-W を示す。壁の高さは 0.13 ~ 0.25 m を測る。貼り床は 0.07 ~ 0.32 m の厚さで施され、カマド周辺は特に硬化していた。ピットは 4ヶ所が確認された。これらピットが主柱穴と考えられる。規模は P1 が径 0.48m・深さ 0.54m、P2 が径 0.64m・深さ 0.47m、P3 が径 0.56m・深さ 0.58m、P4 が径 0.68m・深さ 0.51m を測る。住居掘方は複雑な掘方で、カマドから北西コーナー付近は一段高くなる掘方で、南東コーナー付近が一段深く掘り込まれていた。カマドは北壁中央につくられていた。シルト土と川原石で構築され、袖と天井部は残存していなかったが、火床部壁は川原石が立った状態で確認された。火床部の規模は長軸長 0.92m・短軸長 0.64m を測る。

本址からの出土遺物はカマド周辺や床面上から比較的多く出土した。15 点を図示した。1 と 2 は須恵器蓋である。2 は摘み部が欠損している。3 ~ 6 は須恵器環であり、3 と 4 が底部回転糸切離し、5 と 6 が底部回転ヘラ切りである。7 は有台坏である。8 ~ 10 は須恵器甕であり、10 は底部外面に焼成前のヘラ描沈線が確認できる。11 は土師器の小型甕である。12 ~ 15 は磨り面が確認できる石製品で、いずれも川原石の一面を使用している。

本址はこれらの出土遺物から 8 世紀代の所産と考えられる。

(6) H 6 号住居址

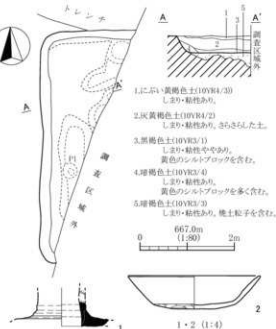
本址は調査区中央の F・G-3・4・5Gr で検出された。本址は圃場整備等ですでに上部が削られ、掘方のみ残存していた。形態は方形で、規模は南北長 5.92 m、東西長 5.60 m を測る。住居面積は 31.19 m² である。主軸方位は N-7°-W を示す。ピットは 16ヶ所が確認された。P1 ~ P4 と P5 ~ P8 がそれぞれ対となる主柱穴と考えられる。この事から本住居址は建て替えと考えられる。規模は P1 が径 0.72・深さ 0.71m、P2 が径 0.72m・深さ 0.74m、P3 が径 0.64m・深さ 0.61m、P4 が径 0.68m・深さ 0.73m、P5 が径 0.39m・深さ 0.49m、P6 が径 0.41m・深さ 0.53m、P7 が径 0.34m・深さ 0.49m、P8 が径 0.34m・深さ 0.44m、P9 が径 0.56m・深さ 0.33m、P10 が径 0.30m・深さ 0.31m、P11 が径 0.40m・深さ 0.28m、P12 が径 0.68m・深さ 0.37m、P13 が径 0.40m、P14 が径 0.24m・深さ 0.29m、P15 が径 0.24m・深さ 0.21m、P16 が径 0.17m・深さ 0.10m を測る。住居掘方は主柱穴に囲まれた中央が一段高く、壁際が一段深く掘り込まれている。掘方の比高差は 0.01 ~ 0.16m を測る。カマド等は確認できなかった。

本址からの出土遺物は少なく、2 点を図示したのみである。1 は土師器環で、内面に放射状の暗文が施されている。2 は磨り石である。本址は出土遺物が少なく不確実ではあるが 7 世紀代の所産と考えられる。

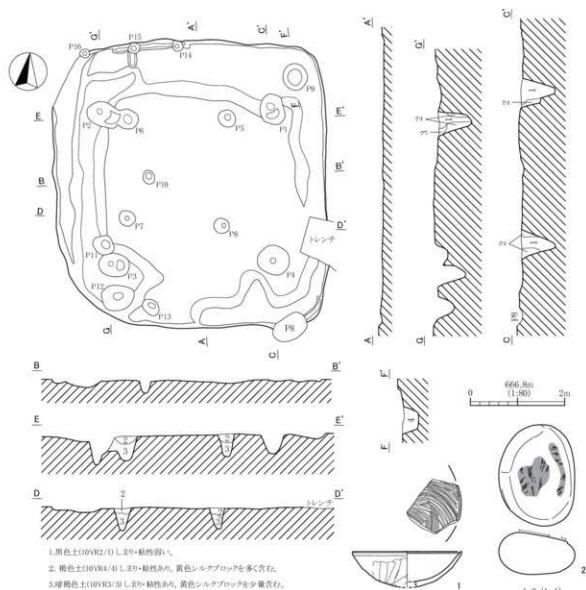
(7) H 7 号住居址

本址は調査区中央の F・G-6Gr で検出された。東側が調査区域外となるため西壁周辺部の検出にとどまった。形態は方形と考えられ、規模は南北長 4.48 m、検出された東西長 1.68 m を測る。床面積は検出部で 3.79 m² である。主軸方位は N-3°-E を示す。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高さは 0.27 ~ 0.32 m を測る。ピットは一ヶ所確認され、規模は P1 が径 0.32m・深さ 0.43m を測る。床は住居址中心側が厚く貼られており、住居掘方は壁際が一段高くなる掘方であった。

本址からの出土遺物は少なく、2 点を図示したのみである。1 は須恵器長頸甕の肩部である。2 は土師器環で、



第 10 図 H 7 号住居址及び出土遺物実測図

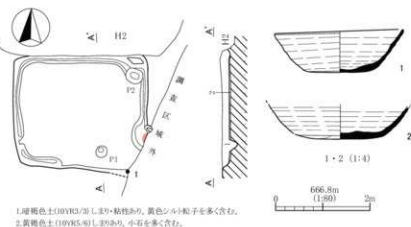


第11図 H6号住居址及び出土遺物実測図

体部が摩耗で成形痕が不明である。本址は出土遺物が少なく不確定ではあるが7世紀代の所産と考えられる。

(8) H8号住居址

本址は調査区東のH・1・9・10Grで検出された。北側をH2号住居址により一部削平されている。形態は方形で、規模は南北長2.16m、東西長2.52mを測る。住居面積は31.19㎡である。主軸方位はNを示す。



第12図 H8号住居址及び出土遺物実測図

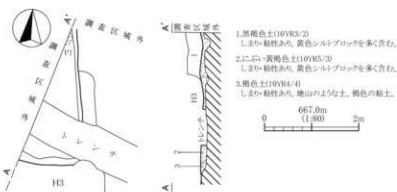
壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高さは0.05～0.20mを測る。壁下には壁溝が巡っており、規模は幅0.12～0.22m、深さ0.03～0.05mを測る。ピットは2ヶ所確認され、規模はP1が径0.26m・深さ0.18m、P2が径0.36m・深さ0.25mを測る。床は全体に薄く貼られており、硬質であった。

カマドは南東コーナー付近に一部焼土が確認できたが、ほとんどが調査区域外となるためカマドとしてよいかは確証を得なかった。

本址からの出土遺物は少なく、2点を図示したのみである。1と2は須恵器杯である。底部は手持ちヘラ削りである。本址は出土遺物が非常に少なく不確実であるが、8世紀代の所産と考えられ、同じ8世紀代の所産のH2よりは遺構の新旧関係より本址の方が古い。

(9) H 9号住居址

本址は調査区西よりのD・E-3Grで検出された。西側が調査区域外となるため東壁周辺部の検出にとどまった。形態は方形と考えられ、規模は検出部の南北長2.72m、検出された東西長1.12mを測る。床面積は検出部で1.73㎡である。主軸方位はN-5°-Wを示す。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高さは0.05～0.23mを測る。ピットは一ヶ所確認され、規模はP1が径0.28m・深さ0.14mを測る。貼り床は地山の褐色土のような土であった。

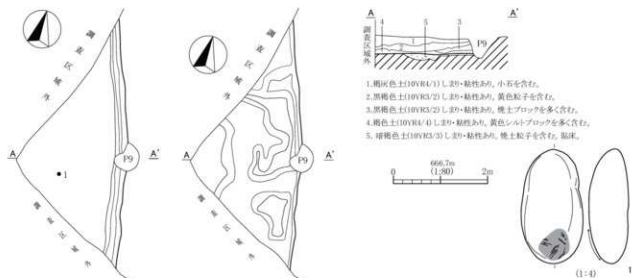


第13図 H 9号住居址実測図

本址からの出土遺物は少なく、図示できるものはなかった。よって所産時期も不明である。

(10) H 10号住居址

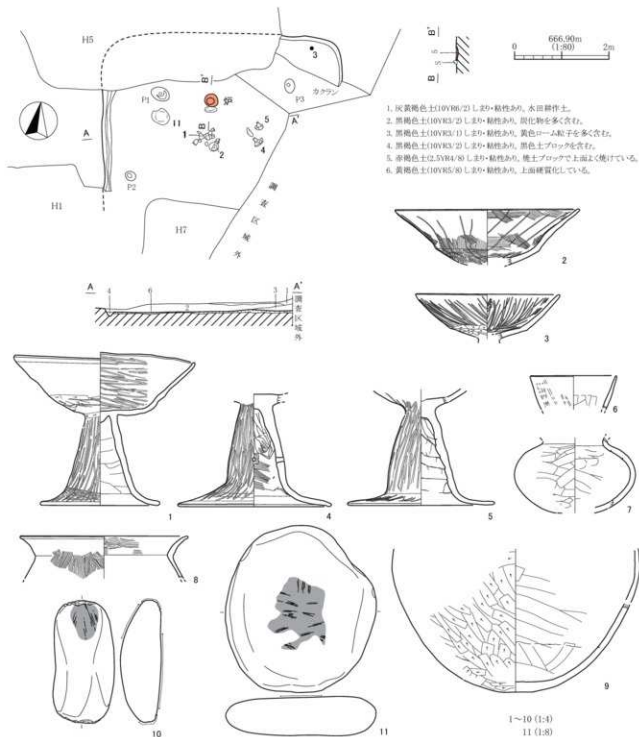
本址は調査区西側のF・G-2・3Grで検出された。西側と南側が調査区域外となるため、東側壁の一部のみ検出された。また、本址は第29図で示したように昭和49年調査のH4号住居址の一部と確認された。このことから、形態は方形で、規模は検出部分の南北長9.4m、東西長8.4mを測る。主軸方位はN-13°-Wを示す。今回の調査部分ではピットは確認されなかった。壁は垂直に立ち上が



第14図 H 10号住居址及び出土遺物実測図

り、壁高さは0.36～0.40mを測る。壁下には壁溝が巡り、規模は幅0.20～0.28m、深さ0.06～0.08mを測る。住居掘方は凹凸が激しく、貼床は0.04～0.09mの厚みで確認された。

本址からの出土遺物は少なく、図示可能なものは1の磨り石のみであった。所産時期は今回の出土遺物からは判断できないが、昭和49年の調査では6世紀前葉の土器がまとまって出土している。



第15図 H11号住居址及び出土遺物実測図

(11) H 11 号住居址

本址は調査区中央のE・F-6・7Grで検出された。本址は東側を調査区域外、南側をH1・7号住居址、北側をH5号住居址により削平されている。形態は方形と考えられ、規模は残存の南北長3.64m、東西長4.68mを測る。床面積は検出部で10.53㎡である。主軸方位はN-6°-Wを示す。壁の高さは0.12~0.19mを測る。床は0.04~0.07mの厚さで施され、炉周辺は特に硬質化していた。ピットは掘方も含め3ヶ所が確認された。規模はP1が径0.40m・深さ0.48m、P2が径0.24m・深さ0.11m、P3が径0.30m・深さ0.50mを測る。P1とP3は主柱穴の可能性がある。

炉は中央北壁よりに構築されていた。いわゆる枕石が置かれ、炉の中央はよく焼けていた。焼土の径は0.30m・深さ0.03mを測る。

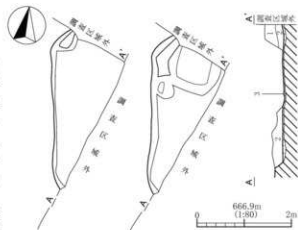
本址からは床面上から多くの遺物が出土した。1~11を図示した。1~5は土師器高環である。2は高環環部の内外面に放射状の暗文が施されている。4は高環脚部であるが、脚中央に焼成前の穿孔がある。6と7はいわゆる小型丸底壺の口縁部と体部である。8は土師器裏で、頸部が「く」の字に曲がるタイプのものである。9は土師器裏の胴部から底部あり、底部は丸底釜みである。10は磨り石、11は磨りの使用痕がある台石と考えられる。

本址はこれらの出土遺物から5世紀中葉、特にカマド導入前の所産時期と捉えられ、佐久地域には希少な事例と考えられる。

(12) H 12 号住居址

本址は調査区東側のD・E-11・12Grで検出された。本址は東側が調査区域外となるため西側の一部のみの検出となった。形態は不明で、規模は検出された南北長2.80m、検出された東西長1.52mを測る。床面積は検出部で2.56㎡である。主軸方位は不明で、壁高は0.14~0.16mを測る。床は0.02~0.17mの厚さで施されていた。掘方は北西側が一段低くなっていた。

本址からの出土遺物は非常に少なく、いわゆる武蔵裏を含む土師器裏片が出土したのみである。よって本址の帰属時期は不明である。



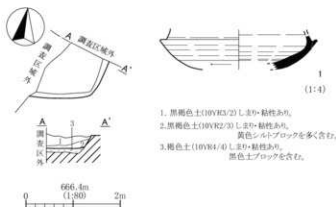
1.灰黄褐色土(10YR4/2) L.20・粘性あり,
2.暗褐色土(10YR3/3) L.10・粘性あり, 黄色シルトブロックを多く含む,
3.黄褐色土(10YR5/8) L.20・粘性あり, 黄色シルトブロックを多く含む, 黏床。

第16図 H 12号住居址実測図

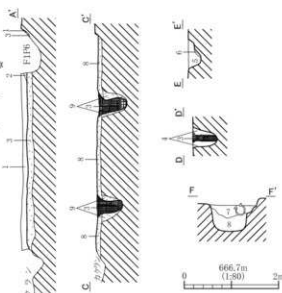
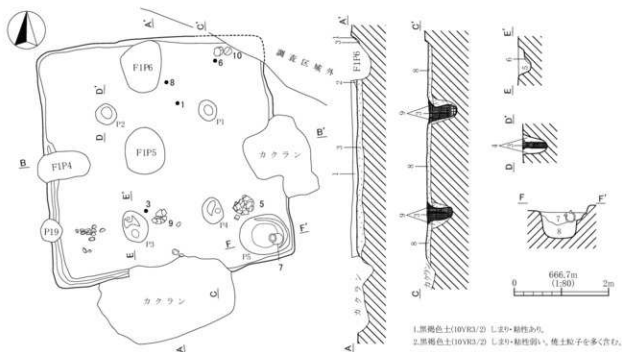
(13) H 13 号住居址

本址は調査区東側のD-10Grで検出された。本址は北側と西側が調査区域外となるため住居南東コーナーのみの検出となった。形態は不明で、規模は検出された南北長0.72m、検出された東西長1.12mを測る。床面積は検出部で0.97㎡である。主軸方位は不明で、壁高は0.09~0.15mを測る。床は0.09~0.12mの厚さで施されていた。

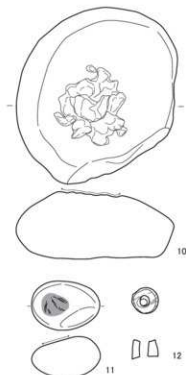
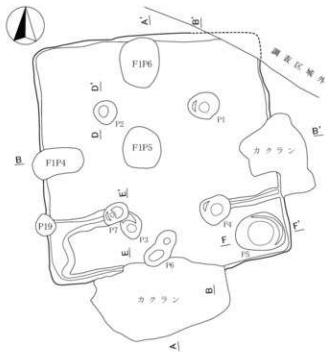
本址からの出土遺物は非常に少なく、1点を図示したのみである。1は須恵器残片であり、いわゆる武蔵裏を含む土師器裏片が出土したのみである。よって本址の帰属時期は不明である。



第17図 H 13号住居址及び出土遺物実測図



- 1.黒褐色土(10VR3/2) しまり・粘性あり。
- 2.黒褐色土(10VR3/2) しまり・粘性弱い、焼土粒子を多く含む。
- 3.褐色土(10VR4/3) しまり・粘性あり、黄色シルトブロックを多く含む。
- 4.褐色土(10VR4/1) しまりやや弱く粘性あり。
- 5.黒色土(10VR2/1) しまり・粘性あり、黄色シルトブロックを含む。
- 6.黄褐色土(10VR5/6) しまり・粘性あり。
- 7.黒褐色土(10VR3/2) しまり・粘性あり。
- 8.黒褐色土(10VR2/2) しまり・粘性あり、黄色シルトブロックを含む。



10-11 (1:4)
12 (1:1)

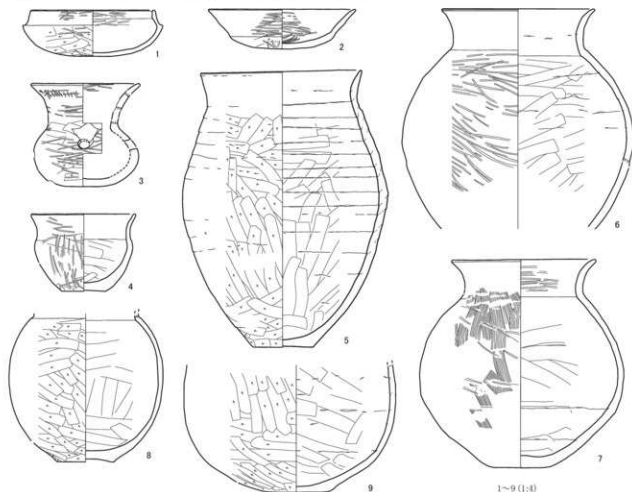
第 18 図 H 14 号住居址及び出土遺物実測図

(14) H 14 号住居址

本址は調査区北側のB・C-6・7Grで検出された。形態は方形で、規模は南北長4.88m、東西長4.73mで、住居床面積は推定で22.12㎡である。主軸方位はN-8°-Wを示す。壁高さは0.09~0.13mを測り、床は0.05~0.10mの厚みで貼られていた。壁直下は一部に壁溝が巡り、間仕切り溝的な部分も確認できた。ピットは掘方時も含め7ヶ所確認された。P1・P2・P7・P4が支柱穴、P5が貯蔵穴と考えられる。規模はP1が径0.44・深さ0.60m、P2が径0.42m・深さ0.51m、P3が径0.72m・深さ0.35m、P4が径0.56m・深さ0.53m、P5が径1.04m・深さ0.57m、P6が径0.88m・深さ0.13m、P7が径0.56m・深さ0.41mを測る。本址の竈は検出されなかったが、残存状況から東カマドの可能性が高い。

本址からの出土遺物は床面上や貯蔵穴を中心に多く出土した。12点を図示した。1と2は土師器坏で、1は須恵器坏身の模倣である。3は土師器の甕であり、焼成前の孔が開けられている。4は土師器の小型甕である。5は土師器の甕で、貯蔵穴脇の床面上より潰れた形で出土した。6~9は土師器甕で、7は貯蔵穴内より落ち込んだ滋養体で出土した。10は敷き石であり、台石的な使用が考えられる。11は磨り石、2は滑石製の白玉である。

本址はこれらの資料から6世紀前半の所産時期と考えられる。



第19図 H 14号住居址出土遺物実測図

(15) H 15号住居址

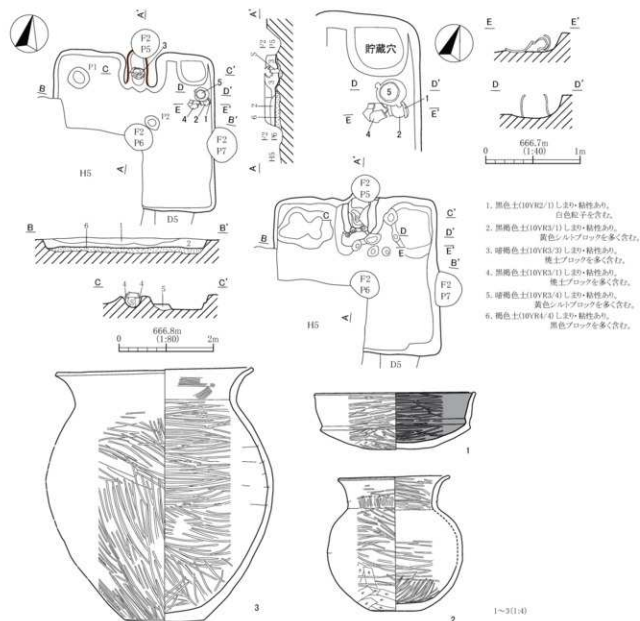
本址は調査区中央のD-6・7Grで検出された。形態は方形で、南西コーナー部をH5号住居址により削平されている。規模は南北長3.08m、東西長3.28mで、住居床面積は残存で7.0㎡である。主

軸方位はN-10°-Wを示す。壁高さは0.14～0.19mを測り、床は0.05～0.13mの厚みで貼られていた。ピットは掘方時も含め7ヶ所確認された。規模はP1が径0.44・深さ0.10m、P2が径0.33m・深さ0.10m、P3が径0.36m・深さ0.07m、P4が径0.36m・深さ0.05m、P5が径0.24m・深さ0.01m、P6が径0.25m・深さ0.04m、P7が径0.18m・深さ0.04mを測る。また本址のカマド東脇には貯蔵穴が検出された。規模は長軸1.33m・短軸1.16m、深さ0.10mを測り、底面は平坦であった。

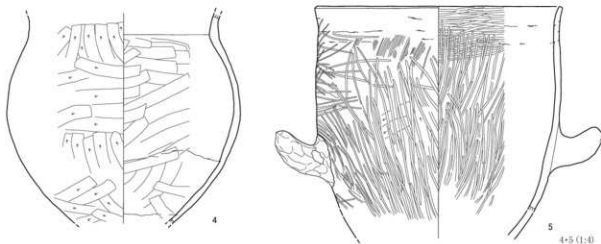
カマドは北壁中央に構築されていた。袖部は地山削り出しで、中央に支脚石が原位置を保って立っていた。また、支脚石の上には図示した3の土師器甕がかけられた状態で出土した。

本址からの出土遺物は先に触れたカマドや貯蔵穴南側の床面上からまとまって出土した。1は土師器甕でほぼ完形品である。内面黒色処理が施されており丁寧なミガキがある。H1号住居址出土の須恵器坏身とセットとなる法量である。2～4は土師器甕である。3は丁寧なミガキが施されている。5は土師器取手付甕である。口縁部を床面に伏した状態で出土した。

本址はこれらの資料から6世紀前半の所産時期と考えられる。



第20図 H15号住居址及び出土遺物実測図

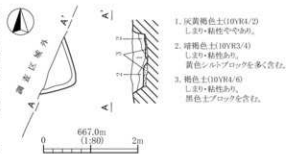


第21図 H 15号住居址出土遺物実測図

(16) H 16号住居址

本址は調査区西側のB-4Grで検出された。住居址のほとんどが調査区域外となり、検出は住居南東コーナー部分のみである。形態は方形と考えられる。規模は検出南北長0.75m、検出東西長0.56mで、住居床面積は検出部分で0.34㎡を測る。主軸方位はN-16°-Wを示す。壁高さは0.26～0.29mを測り、床は0.06mの厚みで貼られていた。

本址からの出土遺物はなく、よって所産時期も不明である。

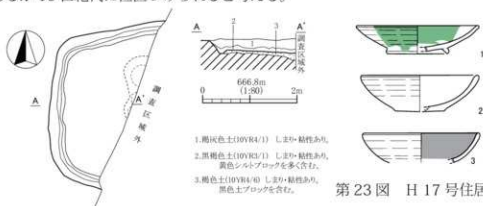


第22図 H 16号住居址実測図

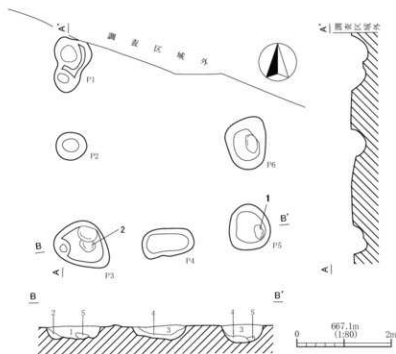
(17) H 17号住居址

本址は調査区中央のC・D-7・8Grで検出された。東側は調査区域外となる。形態は方形と考えられ、規模は検出南北長2.68m、検出東西長1.68mで、住居床面積は検出部で3.68㎡である。主軸方位はN-2°-Eを示す。壁高さは0.19～0.25mを測る。床は中央部分が硬質で、貼床は0.05～0.07mの厚みで貼られていた。壁溝は幅0.20～0.24m、深さ0.05～0.07mで、検出された壁際に一周するよう巡っていた。

本址からの出土遺物は少なかったが3点を図示した。1は灰釉陶器皿であり、釉薬は浸け掛けと考えられる。2と3は土師器環で、3は内面黒色処理されている。本址はこれらの遺物より不確実ではあるが10世紀代に位置づけられると考える。



第23図 H 17号住居址及び出土遺物実測図



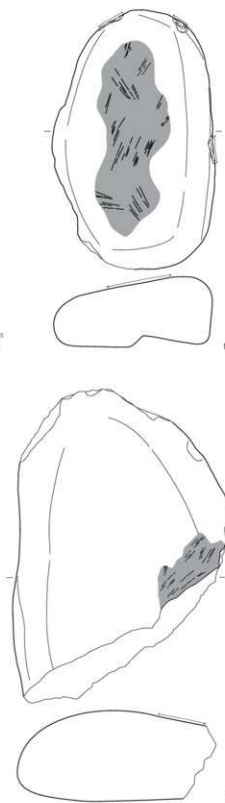
1. 黒褐色土(10YR3/2) しまり・粘性あり、黄色のシルトブロックあり。
2. 褐色土(10YR4/6) しまり・粘性あり。
3. 黒褐色土(10YR3/1) しまり・粘性あり。
4. 暗褐色土(10YR3/4) しまり・粘性あり、黄色のシルトブロックを含む。

第2節 掘立柱建物址

(1) F1号掘立柱建物址

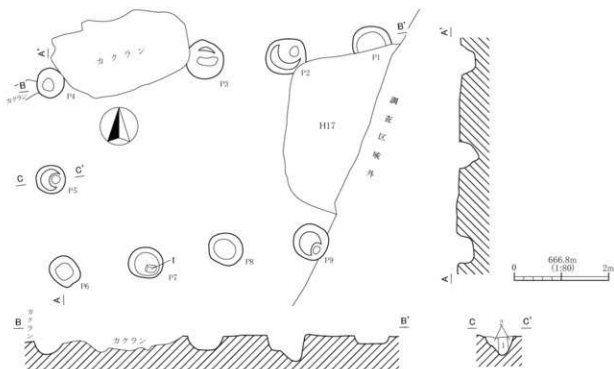
本址は調査区北側のA・B-5・6Grで検出された。北側は調査区域外となる。形態2間×3間以上の側柱式建物址と考えられる。規模は検出桁行長4.16m、梁行長4.0mで、主軸方位はN-3°-Wを示す。各ピットの規模は、P1が径1.56m・深さ0.34m、P2が径0.64m・深さ0.30m、P3が径1.21m・深さ0.29m、P4が径1.12m・深さ0.23m、P5が径0.96m・深さ0.33m、P6が径1.12m・深さ0.36mを測る。ピット内には図示したように大型で磨り面が確認できる川原石が検出されたものもある。

本址からの出土遺物は少なく土器類はいずれも小片であった。種別としては土師器環や土師器甕であり、甕はいわゆる「武蔵甕」と呼ばれる破片が多く、本址の時期を示唆するものと考えられる。図示した礫はピット内からの出土で、いずれも顕著な磨り面が確認できる。



1・2 (1:4)

第24図 F1号掘立柱建物址及び
出土遺物実測図



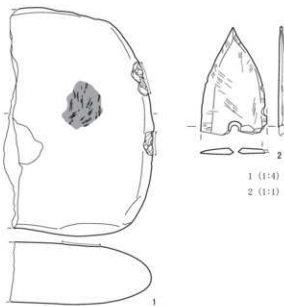
1. 暗褐色土(10YR3/1)土質・粘性ややあり。
2. 暗褐色土(10YR3/4)土質・粘性あり、黄色シストブロックを多く含む。

(2) F2号掘立柱建物址

本址は調査区北側のC・D-6・7・8Grで検出された。東側は調査区域外となる。形態2間×4間以上の側柱式建物址と考えられる。規模は検出桁行長6.88m、梁行長4.0mで、主軸方位はN-84°-Eを示す。各ピットの規模は、P1が径0.88m・深さ0.20m、P2が径0.84m・深さ0.54m、P3が径0.88m・深さ0.31m、P4が径0.64m・深さ0.32m、P5が径0.60m・深さ0.41m、P6が径0.64m・深さ0.32m、P7が径0.72m・深さ0.20m、P8が径0.72m・深さ0.17m、P9が径0.76m・深さ0.27mを測る。

本址からの出土遺物は少なく土器類は小片であった。P3からは須恵器坏片や土師器裏でいわゆる「武蔵甕」と呼ばれる土器片が出土した。図示したのは磨り石と磨製石鏃である。

よって本址の所産時期は不明であるが、出土遺物よりF1号掘立柱建物址と近似する時期と考えられる。

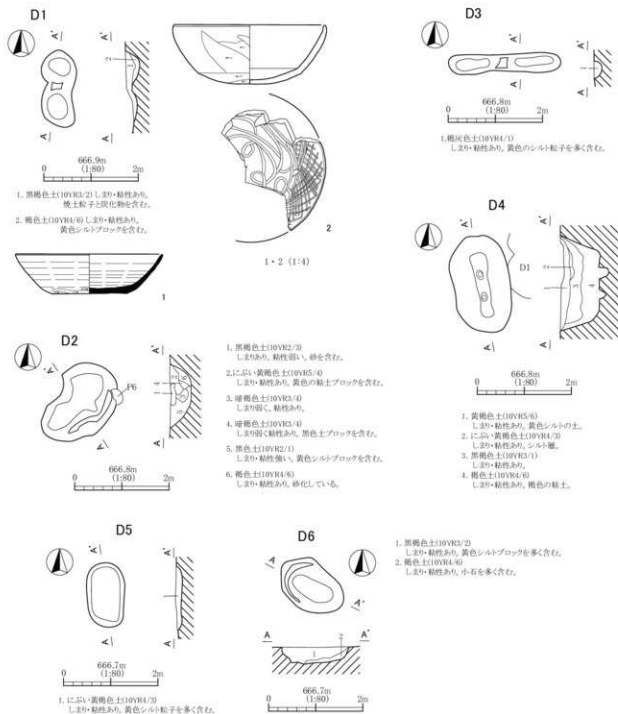


第25図 F2号掘立柱建物址及び
出土遺物実測図

第3節 土坑

今回の調査では6基の土坑を調査した。いずれも形態が整うものは無かったが、D3号土坑は調査区域外に掘立柱建物址がのびるのかもしれない。また、D4号土坑は形状から落とし穴としての使用が考えられる。

出土遺物はD1号土坑が須恵器杯と土師器杯を図示した。その他の土坑からはいずれも小片の土器類で、D5号とD6号土坑からはいわゆる「武蔵甕」と呼ばれる土師器甕片が出土している。



第26図 土坑及び出土遺物実測図

第1表 土坑計測表

単位(m) < > 検出値

遺構名	形態	検出位置	長軸長	短軸長	深さ	出土遺物	備考
D1	不整形	G-3	1.61	0.60	0.30		
D2	不整形	H-8・9	1.88	1.12	0.48		
D3	不整形	I-9・10	2.36	0.36	0.22		
D4	楕円形	G-3	2.08	1.20	0.80		
D5	楕円形	D・E-7	1.36	0.80	0.15	土師器甕 土師器坏	
D6	楕円形	B-5	1.52	0.96	0.36	土師器甕 須恵器蓋	

第4節 溝状遺構

(1) M1号溝状遺構

本址は調査区東側で検出された。調査区を南北に貫くように確認され、北側に向かうに従い幅も広がり、深さも深くなる傾向にあった。検出された規模は幅4.60～5.70m・深さ0.37～0.50mを測る。覆土は自然堆積であり、溝底面は川原石の礫層となった。

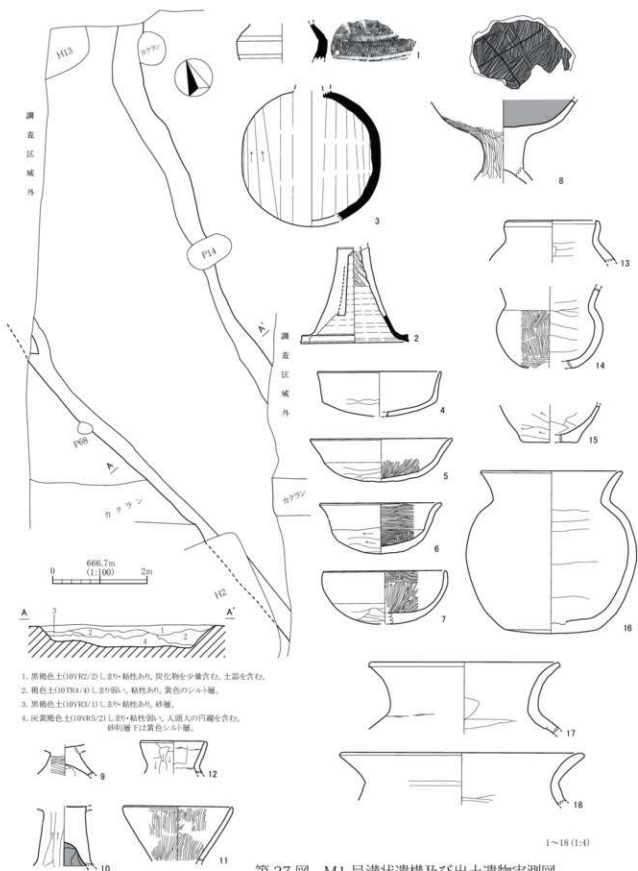
遺物は溝西側の斜面から多く出土した。いずれも細かな細片になっているものが多かった。図示できたものは比較的多く、須恵器・土師器を中心に弥生土器甕や打製石斧・管玉等多彩であった。本址の所産時期であるが、出土遺物は古墳時代後期のものが主体で、一部に弥生時代のものが含まれる状況であった。このことから本址は古墳時代後期に溝状の窪地として存在したと考えられる。

第5節 ビット

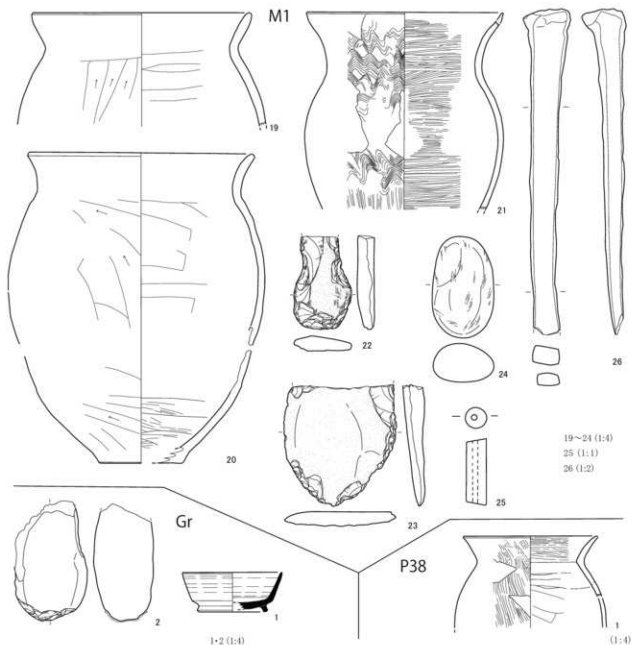
第2表 ビット計測表

()推定 < >検存 (単位: cm)

遺構名	出土位置	長径	短径	深さ	形 態	出土遺物 産層関係	備 考	遺構名	出土位置	長径	短径	深さ	形 態	出土遺物 産層関係	備 考
P1	E-5	35.0	23.0	17.0	円形	黒色土(10YR2/1)		P56	D-6	35.0	32.0	16.0	円形	黒色土(10YR2/1)	
P2	E-4	16.0	14.0	8.0	円形	黒色土(10YR2/1)		P57	C-5	34.0	31.0	24.0	円形	黒色土(10YR2/1)	
P3	F-3	48.0	38.0	17.0	円形	黒色土(10YR2/1)		P58	C-5	90.0	56.0	13.0	楕円形	土師甕	黒色土(10YR2/1)
P4	G-9	68.0	38.0	31.0	不明	土師甕 I段より古		P59	E-6	51.0	41.0	49.0	円形	須恵器 土師甕 I段より新	黒褐色土(10YR2/1)
P5	H-9	74.0	55.0	18.0	楕円形	黒色土(10YR2/1)		P60	C-4	50.0	48.0	34.0	円形	土師甕	黒色土(10YR2/1)
P6	H-9	36.0	30.0	42.0	円形	IX段より新		P61	C-4	66.0	56.0	29.0	円形	土師甕	黒色土(10YR2/1)
P7	I-10	42.0	34.0	18.0	不明	黒色土(10YR2/1)		P62	C-4	46.0	44.0	13.0	円形	土師甕	黒色土(10YR2/1)
P8	G-5	76.0	49.0	20.0	楕円形	II段より新		P63	D-5	74.0	70.0	18.0	円形	土師甕	黒色土(10YR2/1)
P9	G-3	65.0	60.0	45.0	円形	III段より新		P64	F2(P5) に 変 更						
P10	F-3	42.0	42.0	5.0	円形	黒色土(10YR2/1)		P65	C-4	70.0	42.0	31.0	楕円形	土師甕	黒色土(10YR2/1)
P11	F-3	43.0	40.0	4.0	円形	黒色土(10YR2/1)		P66	F2(P1) に 変 更						
P12	G-5	71.0	64.0	35.0	不明	土師甕		P67	F2(P9) に 変 更						
P13	G-5	22.0	20.0	6.0	円形	土師坏	褐色土(10YR5/1)	P68	D-7	37.0	34.0	15.0	円形		黒色土(10YR2/1)
P14	E-11	129.0	64.0	54.0	楕円形	土師甕 M1より新	黒褐色土(10YR3/2)	P69	C-7	92.0	64.0	15.0	楕円形		黒色土(10YR2/1)
P15	E-11	74.0	32.0	39.0	不明	土師甕	黒褐色土(10YR3/2)	P50	D-7	117.0	81.0	48.0	不整形	土師甕	黒色土(10YR2/1)
P16	E-10	80.0	72.0	22.0	円形	須恵器 土師甕・瓶 M1より新	黒褐色土(10YR3/2)	P51	D-7	100.0	58.0	18.0	不整形	土師坏(内黒)	黒色土(10YR2/1)
P17	E-10	66.0	50.0	30.0	楕円形	土師坏・甕 M1より新	黒褐色土(10YR3/2)	P52	F2(P9) に 変 更						
P18	F1(P4) に 変 更							P53	C-7	42.0	41.0	18.0	円形	II段より古	黒色土(10YR2/1)
P19	C-6	47.0	44.0	22.0	円形	土師甕	黒色土(10YR2/1)	P54	C-4	72.0	70.0	25.0	円形		黒色土(10YR2/1)
P20	A-5	44.0	32.0	24.0	楕円形		黒色土(10YR2/1)	P55	D-6	73.0	47.0	15.0	楕円形	II段より古	黒色土(10YR2/1)
P21	A-5	106.0	60.0	65.0	楕円形	土師甕	黒色土(10YR2/1)	P56	D-5	25.0	22.0	8.0	円形		黒色土(10YR2/1)
P22	F1(P1) に 変 更							P57	D-5	31.0	26.0	18.0	円形		黒色土(10YR2/1)
P23	F1(P2) に 変 更							P58	F2(P6) に 変 更						
P24	F2(P7) に 変 更							P59	F2(P6) に 変 更						
P25	B-4	36.0	32.0	32.0	円形		黒色土(10YR2/1)	P60	D-7	30.0	27.0	12.0	円形		黒色土(10YR2/1)
P26	B-5	68.0	68.0	11.0	楕円形	土師甕	黒色土(10YR2/1)	P61	D-7	44.0	43.0	12.0	円形		黒色土(10YR2/1)
P27	F1(P5) に 変 更							P62	D-7	88.0	86.0	19.0	円形		黒色土(10YR2/1)
P28	C-4	48.0	42.0	27.0	円形	土師甕	黒色土(10YR2/1)	P63	D-4	44.0	44.0	13.0	円形		黒色土(10YR2/1)
P29	B-5	98.0	58.0	39.0	楕円形	土師甕	黒色土(10YR2/1)	P64	D-4	72.0	60.0	18.0	円形	土師甕	黒色土(10YR2/1)
P30	F1(P3) に 変 更							P65	D-4	63.0	44.0	11.0	楕円形	土師高坏 P66より古	黒色土(10YR2/1)
P31	F1(P6) に 変 更							P66	D-4	80.0	72.0	45.0	円形	土師坏・甕 P68より新	黒色土(10YR2/1)
P32	F2(P4) に 変 更							P67	F-9	34.0	22.0	12.0	不整形		黒色土(10YR2/1)
P33	F2(P3) に 変 更							P68	F-9	45.0	33.0	11.0	円形	M1より新	黒色土(10YR2/1)
P34	C-5	38.0	36.0	24.0	円形	土師甕	黒色土(10YR2/1)	P69	G-5	32.0	24.0	8.0	円形		黒色土(10YR2/1)
P35	C-5	35.0	34.0	23.0	円形	土師甕	黒色土(10YR2/1)	P70	G-4	21.0	19.0	6.0	円形		黒色土(10YR2/1)



第 27 図 M1 号溝状遺構及び出土遺物実測図



第28図 M1号溝状遺構及びピット・検出遺物実測図

第三章 調査成果

調査を通しての成果をここで列記しまとめとしたい。まず、第1点目として昭和49年に行われた第1次の調査範囲が接することが確認できたことは調査成果の一つと捉えられる。また、佐久市では検出例の少ない5世紀中葉の住居址1軒が確認されたことも貴重である。近接する宮添遺跡で古墳時代前期の遺構が発見されているため、市道遺跡周辺で古墳時代の段階的發展が把握できる見通しがついてきた。最後にH1号住居址出土の石製紡錘車がある。この紡錘車には上面に三角文を組み合わせた文様を四か所施文している。古墳時代の石製紡錘車は刻線による文様が知られているが、今回発見された形態は管見に触れない。今後の類例調査が必要であるが希少な発見と言える。

以上雑駁であるが調査のまとめとしたい。

第3表 出土遺物観察表(1)

(cm) (g)

H1	種別	種類	度量			成形・調整・文様		埋定値(埋存層)・丸座		
			口径(内)	底径(内)	高さ(内)	内径	外径			
1	須臾器	埴	15.6	-	5.0	コハコナダ	コハコナダ 底部凹陥(ヘラケツ)	完全実測		
2	須臾器	埴	17.2	-	10.5	コハコナダ	コハコナダ 体部下陥凹陥(ヘラケツ)	完全実測	Ⅱ区・Ⅲ区	
3	土師器	埴	13.0	-	15.5	網罟	口縁コナダ 底部ヘラケツ(ヘラケツ)	完全実測	Ⅱ区	
4	土師器	埴	13.1	12.0	5.4	七折→黒色地膚	ヘラケツ 底部ヘラケツ	完全実測		
5	土師器	埴	13.3	-	4.2	七折→黒色地膚	ヘラケツ	完全実測	Ⅱ区	
6	土師器	埴	13.4	-	14.2	網罟	網罟	完全実測	Ⅱ区	
7	土師器	埴	16.4	-	9.8	ナダ→ヘラケツ	ナダ→ヘラケツ	完全実測	Ⅱ区・Ⅲ区	
8	土師器	埴	11.8	-	7.8	ナダ	ヘラケツ	完全実測	Ⅱ区	
9	土師器	埴	17.7	8.8	26.5	ヘラケツ	ヘラケツ	完全実測	Ⅱ区・Ⅲ区・Ⅳ区	
7a	瓦	材	種別	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考		出土位置
10	瓦	形瓦	30.0	16.1	2.1	4.9g	焼物なし(平ら面)			
11	瓦	瓦形	18.1	16.7	15.6	30.0g	焼物なし(裏面欠損 裏面割)			
12	瓦	網罟	最大径 4.1	最小径 2.5	1.6	36.30	孔径約 70 焼物なし(網罟裏面に割)			
13	瓦	網罟	最大径 3.8	最小径 2.8	1.6	32.97	孔径約 60 焼物なし(網罟裏面に割)			Ⅱ区
H2	種別	種類	度量			成形・調整・文様		埋定値(埋存層)・丸座		
			口径(内)	底径(内)	高さ(内)	内径	外径			
1	須臾器	蓋	14.1	13.5	2.4	コハコナダ	コハコナダ 天身部平打ち(ヘラケツ)	完全実測		
2	須臾器	埴	13.4	8.6	4.2	コハコナダ 大だすき	コハコナダ→右側面未削	完全実測	Ⅱ区	
3	土師器	埴	10.4	-	14.4	コハコナダ	コハコナダ	完全実測	Ⅱ区	
H3	種別	種類	度量			成形・調整・文様		埋定値(埋存層)・丸座		
			口径(内)	底径(内)	高さ(内)	内径	外径			
1	須臾器	蓋	14.0	-	1.5	コハコナダ	コハコナダ 天身部凹陥(ヘラケツ)	完全実測		
2	須臾器	埴	13.2	6.0	4.3	コハコナダ 大だすき	コハコナダ 底部左右側面未削 大だすき	完全実測		
H4	種別	種類	度量			成形・調整・文様		埋定値(埋存層)・丸座		
			口径(内)	底径(内)	高さ(内)	内径	外径			
1	土師器	埴	16.6	13.4	5.8	ヘラケツ→黒色地膚	ヘラケツ	完全実測		
2	土師器	埴	13.4	-	13.6	ヘラケツ	ヘラケツ	完全実測	Ⅱ区	
3	土師器	埴	16.9	5.2	27.8	口縁コナダ	口縁コナダ ヘラケツ(底面ヘラケツ)	完全実測		
H5	種別	種類	度量			成形・調整・文様		埋定値(埋存層)・丸座		
			口径(内)	底径(内)	高さ(内)	内径	外径			
1	須臾器	蓋	12.4	12.6	2.5	コハコナダ 大だすき	コハコナダ 天身部凹陥(ヘラケツ) つまみ取付 大だすき	完全実測	Ⅱ区・Ⅲ区	
2	須臾器	蓋	10.4	-	13.2	コハコナダ 大だすき	コハコナダ 天身部凹陥(ヘラケツ) 大だすき	完全実測	Ⅱ区・Ⅲ区	
3	須臾器	埴	14.4	7.8	3.9	コハコナダ 大だすき	コハコナダ→右側面未削	完全実測	Ⅱ区	
4	須臾器	埴	14.4	7.6	4.2	コハコナダ	コハコナダ→右側面未削	完全実測	Ⅱ区	
5	須臾器	埴	14.2	9.2	4.1	コハコナダ 大だすき	コハコナダ→右側面ヘラケツ 大だすき	完全実測	Ⅱ区	
6	須臾器	埴	14.6	9.0	3.6	コハコナダ 大だすき	コハコナダ→右側面ヘラケツ 大だすき	完全実測	Ⅱ区	
7	須臾器	有台形	15.4	9.8	7.8	コハコナダ	コハコナダ→側面未削→両台形	完全実測	Ⅱ区	
8	須臾器	埴	13.4	-	6.7	七折瓦	平打ち	完全実測		
9	須臾器	埴	14.2	13.4	-	七折瓦	平打ち	完全実測	Ⅱ区	
10	須臾器	埴	12.2	12.7	-	ナダ	ナダ 下部平打ち(ヘラケツ) 底部ヘラケツ	完全実測	Ⅱ区・Ⅲ区	
11	土師器	小笠	10.2	5.2	11.9	コハコナダ	コハコナダ→側面未削 下蓋子筒(ヘラケツ)	完全実測	Ⅱ区・Ⅲ区	
7a	瓦	材	種別	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考		出土位置
12	瓦	覆瓦	15.6	11.6	5.2	10.1g	焼物なし(平ら面)			
13	瓦	覆瓦	26.0	16.5	6.6	23.0g	焼物なし(下部欠損 平ら面) 裏面に網罟			
14	瓦	形瓦	32.7	18.0	19.0	42.3g	焼物なし(網罟欠損 平ら面) (裏面にL)			
15	瓦	形瓦	27.4	25.0	7.5	6.5g	焼物なし(平ら面)			
H6	種別	種類	度量			成形・調整・文様		埋定値(埋存層)・丸座		
			口径(内)	底径(内)	高さ(内)	内径	外径			
1	土師器	埴	11.4	-	13.6	短ス	ヘラケツ	完全実測	Ⅱ区	
7a	瓦	材	種別	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考		出土位置
2	瓦	覆瓦	10.8	9.1	4.4	14.0g	焼物なし(平ら面)			
H7	種別	種類	度量			成形・調整・文様		埋定値(埋存層)・丸座		
			口径(内)	底径(内)	高さ(内)	内径	外径			
1	須臾器	有台形	-	-	4.1	コハコナダ 自然割付	コハコナダ 自然割付	完全実測	Ⅱ区	
2	土師器	埴	14.4	9.0	3.5	ナダ	ナダ 底部ヘラケツ(裏面)	完全実測	Ⅱ区・Ⅲ区	

第4表 出土遺物観察表(2)

HB	種別	器種	法 量			成 形 ・ 装 飾 ・ 文 様		測定値()/残存数()/凡数()		
			口径(径)	口径幅	底径(厚)	内 蓋	外 蓋	備 考	出土位置	
			口径(径)	口径幅	底径(厚)	内 蓋	外 蓋	備 考	出土位置	
1	須恵器	杯	13.2	6.6	4.4	コウナギ 丸底平口瓶	コウナギ→白磁→ヘラツグ→平唇丸ヘラツグの丸底平口瓶	完全実測		
2	須恵器	杯	—	9.0	3.7	コウナギ	コウナギ→白磁→ヘラツグ	完全実測	Ⅱ区	
H10	窯 材	部 種	最大長	最大幅	最大厚	重 量	備 考		測定値()/残存数()	出土位置
1	6期	窯石	12.1	6.6	4.4	471.0	既熟なし(平口瓶)			
H11	種別	器種	法 量			成 形 ・ 装 飾 ・ 文 様		測定値()/残存数()/凡数()		
			口径(径)	口径幅	底径(厚)	内 蓋	外 蓋	備 考	出土位置	
1	土師器	高杯	19.3	0.21	16.2	杯底→ヘラツグを 磨製ナデ	杯底ナデ、杯下蓋→ヘラツグ→ヘラツグを 磨製ヘラツグ	完全実測	Ⅰ・Ⅱ区	
2	土師器	高杯	19.6	—	15.0	ハケメ→刷文	ハケメ→口縁部→コナギ→刷文	完全実測		
3	土師器	高杯	15.3	—	4.8	磨製段縁文	磨製段縁文、杯下蓋→ヘラツグ	完全実測		
4	土師器	高杯	—	16.3	11.9	杯底・唇部→ハケメ	ヘラツグを 磨製ナデ	完全実測	構成面穿孔 Ⅱ区	
5	土師器	高杯	—	15.6	11.3	ナデ	ヘラツグを	完全実測		
9	土師器	小型 丸底蓋	6.3	—	3.6	ヘラツグ	ハケメ→ナデ	円形実測	Ⅱ区	
7	土師器	小型 丸底蓋	—	—	4.6	ナデ	ヘラツグ	円形実測	Ⅰ・Ⅱ区	
8	土師器	壺	0.70	—	4.5	ハケメ	ハケメ	円形実測	Ⅰ区	
9	土師器	壺	—	—	13.2	ヘラツグ	ヘラツグ	円形実測	Ⅰ・Ⅱ区	
No.	窯 材	部 種	最大長	最大幅	最大厚	重 量	備 考		測定値()/残存数()/凡数()	
10	6期	窯→窯石	13.0	6.2	4.4	365.0	既熟なし(平口瓶) 既熟なし(磨製ナデ)		Ⅰ区	
11	6期	窯石	20.4	22.1	9.2	1536.0	既熟なし(段縁ナデ) 平口瓶			
H13	種別	器種	法 量			成 形 ・ 装 飾 ・ 文 様		測定値()/残存数()/凡数()		
			口径(径)	口径幅	底径(厚)	内 蓋	外 蓋	備 考	出土位置	
1	須恵器	杯	—	—	4.2	コウナギ	コウナギ→白磁→磨製ヘラツグ	円形実測	Ⅱ区	
H14	種別	器種	法 量			成 形 ・ 装 飾 ・ 文 様		測定値()/残存数()/凡数()		
			口径(径)	口径幅	底径(厚)	内 蓋	外 蓋	備 考	出土位置	
1	土師器	杯	03.25	0.40	4.9	ナデ 厚肉、口縁→ヘラツグ	口縁部→ヘラツグを 磨製ヘラツグ→ヘラツグ	円形実測		
2	土師器	杯	03.60	0.40	4.2	ヘラツグ	口縁部→ヘラツグを 磨製ヘラツグ→ヘラツグ	円形実測	Ⅰ区 西宮小	
3	土師器	罐	01.50	—	16.9	口縁部→ヘラツグを 磨製ナデ	口縁部→ヘラツグを 磨製ヘラツグ 唇部→ヘラツグを 磨製ヘラツグ	完全実測		
4	土師器	小型壺	01.3	4.6	8.2	ヘラツグ	ナデ 磨製ヘラツグ→ヘラツグ	完全実測	Ⅰ区	
5	土師器	壺	17.1	6.3	29.1	ヘラツグ	ヘラツグ	完全実測		
6	土師器	壺	06.20	—	23.3	ヘラツグ	ヘラツグ	円形実測	Ⅰ区	
7	土師器	壺	15.3	6.4	22.1	ナデ、口縁→ヘラツグ	ハケメ→ヘラツグ	完全実測		
8	土師器	壺	—	6.9	13.2	ヘラツグ	ヘラツグ	完全実測	Ⅱ区	
9	土師器	壺	—	6.9	13.5	ヘラツグ	ヘラツグ	完全実測	Ⅰ区	
No.	窯 材	部 種	最大長	最大幅	最大厚	重 量	備 考		測定値()/残存数()/凡数()	
10	6期	窯石	18.2	17.1	7.8	2.99kg	既熟あり(平口瓶) 正造(磨製)			
11	6期	窯石	7.2	3.2	4.2	294.3	既熟なし(平口瓶)		Ⅱ区	
12	6期	窯石	0.70	0.70	0.50	0.42	口径20 既熟なし		Ⅱ区小	
H16	種別	器種	法 量			成 形 ・ 装 飾 ・ 文 様		測定値()/残存数()/凡数()		
			口径(径)	口径幅	底径(厚)	内 蓋	外 蓋	備 考	出土位置	
1	土師器	杯	17.1	15.9	6.1	ヘラツグ→黒色処理	ヘラツグを 磨製ヘラツグ→ヘラツグ	完全実測		
2	土師器	壺	11.8	5.5	14.2	ヘラツグ	唇部→ハケメ 下部→ヘラツグのヘラツグ	完全実測		
3	土師器	壺	03.60	8.4	26.2	ヘラツグを、口縁部→ハケメ	ヘラツグを 磨製上平ナデ→ヘラツグ	完全実測		
4	土師器	壺	—	—	23.3	ヘラツグ	ヘラツグ	円形実測	Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ区	
5	土師器	壺	36.2	—	24.6	ヘラツグ	ハケメ→ヘラツグ→ヘラツグ	完全実測	Ⅰ区	
H17	種別	器種	法 量			成 形 ・ 装 飾 ・ 文 様		測定値()/残存数()/凡数()		
			口径(径)	口径幅	底径(厚)	内 蓋	外 蓋	備 考	出土位置	
1	既熟陶器	皿	03.60	0.20	3.9	コウナギナデ 磨製ヘラツグ	コウナギナデ 磨製ヘラツグ	円形実測	Ⅰ区	
2	土師器	杯	03.60	0.20	3.9	磨製	コウナギ	円形実測	Ⅰ区	
3	土師器	杯	02.60	—	3.2	黒色処理	コウナギ	円形実測	Ⅰ区	

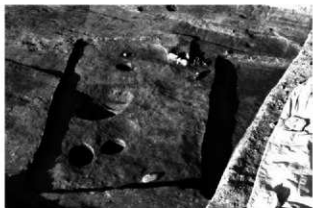
第5表 出土遺物観察表(3)

(cm) (g)

F1	高	材	器	種	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考	規定値()/検存値()	出土位置
1	6.0	台6			17.2	17.2	7.9	4.9 kg	板敷心、一部欠損(平断面) 縁辺に縦打痕あり		IV
2	6.0	台6			13.2	13.1	0.7	0.6 kg	板敷心、上部欠損(平断面)		IV
F2	高	材	器	種	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考	規定値()/検存値()	出土位置
1	6.0	台6			12.1	12.2	7.2	4.4 kg	板敷心、片側欠損(平断面) 縁辺に縦打痕あり		IV
2	6.0	磨製石版			11.00	11.00	0.15	1.20g	孔径0.20×0.20 板敷心なし 基部欠損		IV
D1	種別	器種	法量			成形・調整・文様			規定値()/検存値()/凡例●		出土位置
			口径(㎝)	底径(㎝)	器高(㎝)	内 蓋	外 蓋	備 考			
1	土師器	甕	0.50	0.50	4.2	コナナダ 式テテ付	コナナダ 基部・底面両縁へラナダ付 丸底テテ付	同和式調			
2	土師器	甕	0.60	0.60	6.2	口縁コナナダ 縁支	口縁コナナダ へラナダ付	同和式調			
M1	種別	器種	法量			成形・調整・文様			規定値()/検存値()/凡例●		出土位置
			口径(㎝)	底径(㎝)	器高(㎝)	内 蓋	外 蓋	備 考			
1	須恵器	罐	-	-	14.2	コナナダ		同和式調		I区	
2	須恵器	高脚	-	-	11.40	コナナダ	へラナダ	同和式調		I・Ⅱ区	
3	須恵器	ブツク型	-	-	11.4	コナナダ	コナナダ 胴縁(コナナダ)	同和式調		Ⅱ区	
4	土師器	甕	0.20	-	14.0	磨製	へラナダ	同和式調		Ⅱ区	
5	土師器	甕	0.50	0.25	4.6	口縁コナナダ へラナダ付	口縁コナナダ へラナダ付	同和式調		I区	
6	土師器	甕	0.20	-	5.4	へラナダ	口縁コナナダ へラナダ付	定北式調		I区	
7	土師器	甕	0.20	-	0.6	へラナダ	口縁コナナダ へラナダ付	定北式調		I・Ⅱ区	
8	土師器	高脚	-	-	0.8	へラナダ 胴縁 藍色付	へラナダ	定北式調		I区	
9	土師器	高脚	-	-	0.3	へラナダ	へラナダ	定北式調		I区	
10	土師器	高脚	-	-	0.4	片側へラナダ一貫色付 胴縁内面へラナダへ藍色付	へラナダ	定北式調		Ⅱ区	
11	土師器	小型甕	0.10	-	0.8	へラナダ	へラナダ	同和式調		I区	
12	土師器	小型甕	0.40	-	0.4	へラナダ	へラナダ	同和式調		I区	
13	土師器	小型甕	0.60	-	0.4	口縁コナナダ へラナダ	ナダ	同和式調		Ⅱ区	
14	土師器	小型甕	-	-	0.6	口縁コナナダ へラナダ	口縁コナナダ ナダ目	同和式調		I・Ⅱ区	
15	土師器	小型甕	-	-	0.40	へラナダ	へラナダ	同和式調		Ⅱ区	
16	土師器	甕	0.50	0.6	17.2	口縁コナナダ へラナダ	口縁コナナダ	同和式調		I・Ⅱ区	
17	土師器	甕	0.50	-	17.2	口縁コナナダ へラナダ	口縁コナナダ 胴縁	同和式調		I区 ナン	
18	土師器	甕	0.60	-	15.6	口縁コナナダ へラナダ	口縁コナナダ	同和式調		I区	
19	土師器	甕	0.50	-	12.0	口縁コナナダ へラナダ	口縁コナナダ へラナダ付	同和式調		I区	
20	土師器	甕	24.0	0.60	02.0	口縁コナナダ へラナダ ナダ目の残ナダ	口縁コナナダ へラナダ	定北式調		I区	
21	弥生	甕	0.80	-	00.9	へラナダ	裾縁直支え へラナダ	同和式調		I区	
No	高	材	器	種	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考	規定値()/検存値()	出土位置
22	6.0	打製石			9.8	06.1	1.7	134.1g	板敷心、基部欠損 厚縁部あり		Ⅱ区
23	6.0	打製石			12.8	12.8	02.9	306.0g	板敷心、基部欠損		I区
24	6.0	磨石			10.6	6.5	4.2	447.5g	板敷心、全部欠損		I区
25	6.0	磨石			0.55	0.55	1.80	1.27g	孔径0.15 板敷心なし		I区
26	磨製石	型			17.3	2.5	2.0	115.4g	片側欠損		
Gp	種別	器種	法量			成形・調整・文様			規定値()/検存値()/凡例●		出土位置
			口径(㎝)	底径(㎝)	器高(㎝)	内 蓋	外 蓋	備 考			
1	土師器	甕	0.42	-	09.7	口縁コナナダ へラナダ	口縁コナナダ へラナダ	同和式調		PG	
Gt	種別	器種	法量			成形・調整・文様			規定値()/検存値()/凡例●		出土位置
			口径(㎝)	底径(㎝)	器高(㎝)	内 蓋	外 蓋	備 考			
1	須恵器	有台杯	0.60	07.4	4.2	コナナダ	コナナダ 高台付	同和式調		ナン	
No	高	材	器	種	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考	規定値()/検存値()	出土位置
2	6.0	磨石			12.7	17.6	06.4	701.0g	板敷心、上部欠損 断面に縦打痕		D区



第29図 市道遺跡・Ⅱ次・Ⅵ次調査全体図



H 1号住居址



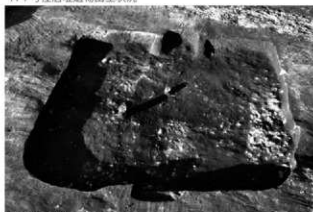
H 1号住居址カマド



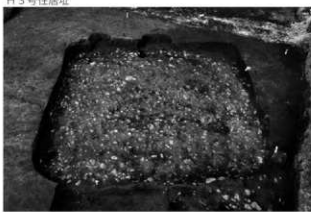
H 1号住居址遺物出土状況



H 3号住居址



H 2号住居址



H 2号住居址掘方



H 4号住居址 (令和元年調査分)



H 4号住居址 (令和2年調査分)

図版 2



H 5号住居址



H 5号住居址カマド



H 6号住居址



H 7号住居址



H 8号住居址



H 9号住居址



H10号住居址



H12号住居址



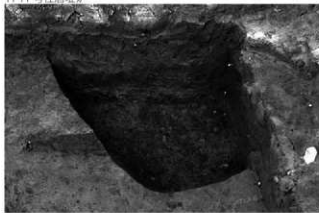
H 11 号住居址



H 11 号住居址部



H 11 号住居址遺物出土状況



H 13 号住居址



H 14 号住居址



H 14 号住居址掘方



H 14 号住居址遺物出土状況

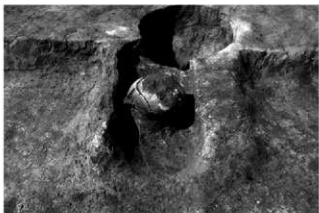


H16 号住居址

図版 4



H 15号住居址



H 15号住居址カマド



H 15号住居址遺物出土状況



H 17号住居址



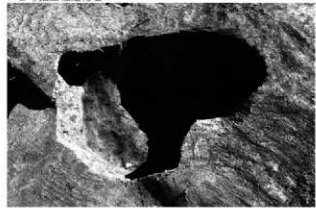
F 1号掘立柱建物址



F 2号掘立柱建物址



D 1号土坑



D 2号土坑



D 3号土坑



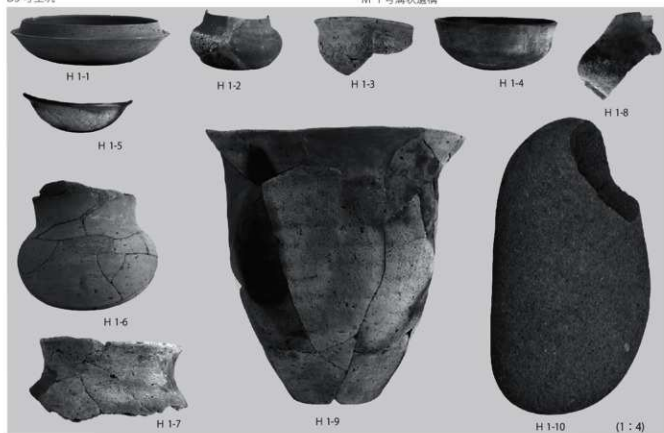
D 4号土坑

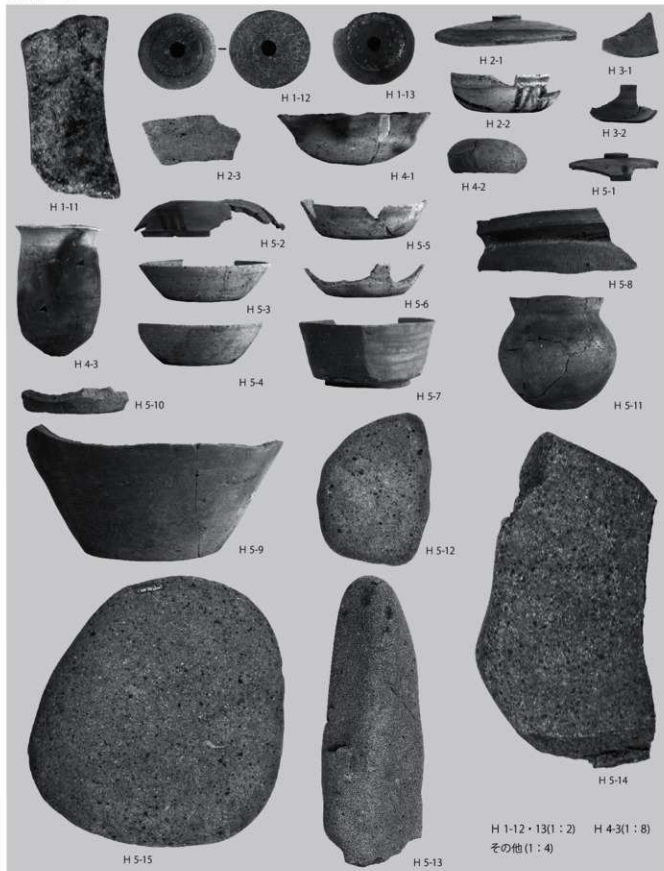


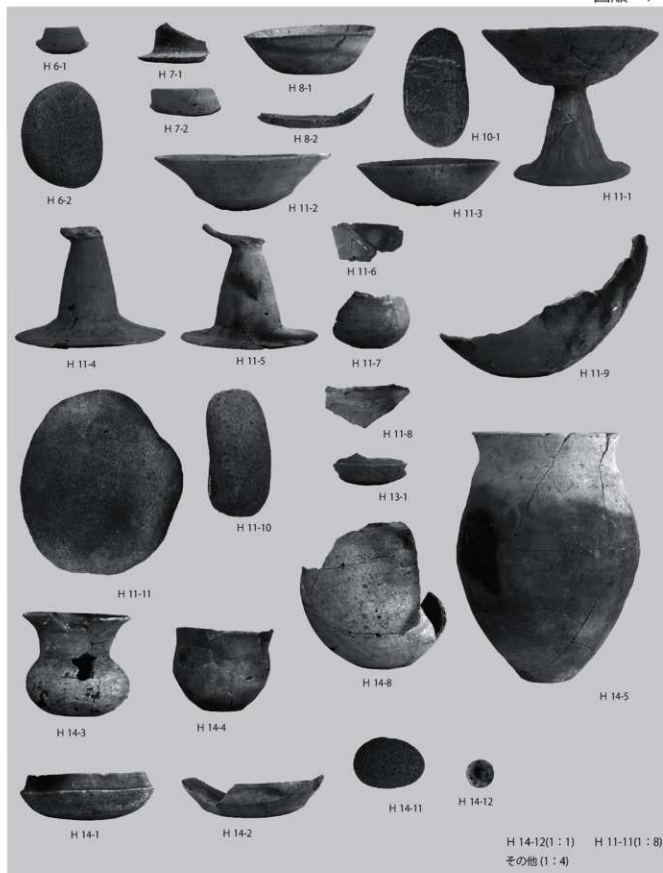
D5号土坑

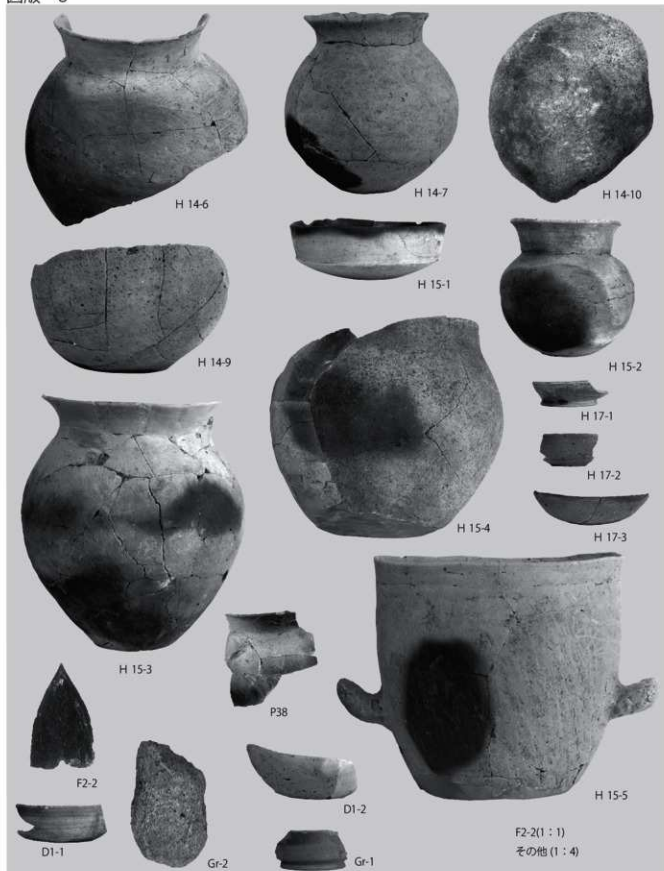


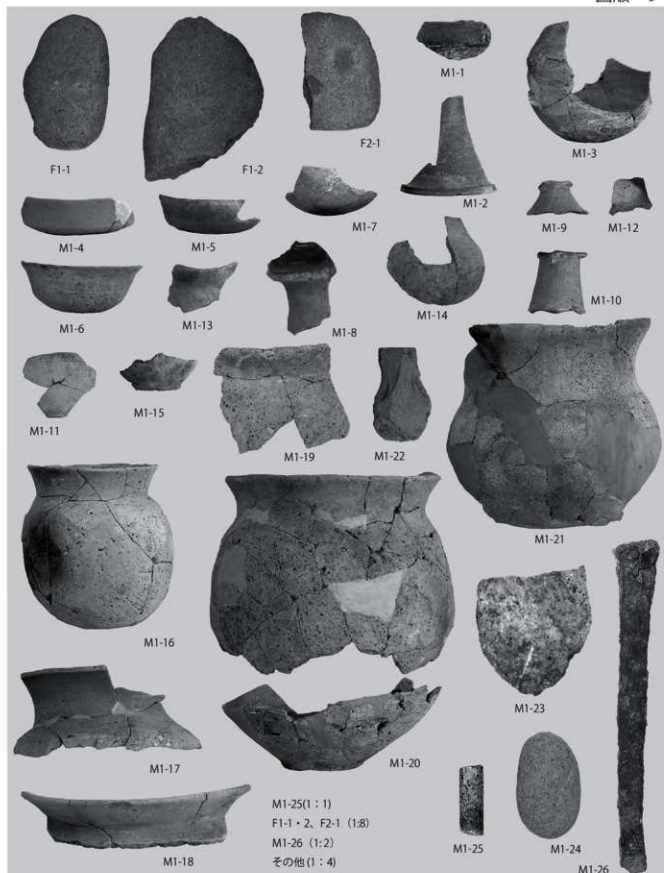
M 1号溝状遺構











報告書抄録

ふりがな	みちづかいせきぐん いちみちいせきろく							
書名	三千東遺跡群 市道遺跡VI							
副書名								
シリーズ名	佐久市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第278集							
編著者名	富沢 一明							
編集機関	佐久市教育委員会 社会教育部 文化振興課							
所在地	長野県佐久市中込2913 TEL0267-63-5321 FAX0267-63-5322							
発行年月日	2021年3月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 (㎡)	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
みちづかいせきぐん いちみちいせき ろく 三千東遺跡群 市道遺跡VI	さくしみちづか 佐久市三塚 127-1、127-2	20217	417	36° 13.52	138° 27.21	20191202 ～ 20200423	560	ホテル建設 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
三千東遺跡群 市道遺跡VI	集落址	古墳 奈良 平安	住居址 17軒 土坑 6基 掘立柱建物址 2棟 溝状遺構 1本	弥生土器 土師器 須恵器 石製品 鉄製品				
要約	<p>沖積地内の微高地に展開する古代の集落の一部分を調査した。周辺の調査事例と同様に古墳時代から奈良・平安時代と考えられる住居跡が検出された。また、検出された住居の中には、佐久地域では希少な5世紀前半代と考えられる住居が含まれていた。出土遺物としては6世紀代の住居内より、変形の三角文を刻んだ石製紡錘車が出土した。</p>							

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第278集

三千東遺跡群 市道遺跡VI

2021年 3月

編集・発行 佐久市教育委員会

〒385-8501 長野県佐久市中込3056

社会教育部 文化振興課 文化財事務所

〒385-0051 長野県佐久市中込2913

☎0267-63-5321

印刷所 キクハラインク有限公司